

スクール・エンゲージメントと身近な対人関係の関連 —中高生の違いに注目して—

吉武尚美 (順天堂大学)

キーワード：スクール・エンゲージメント，対人関係，多母集団分析

中学・高校期の学業不振や学習意欲の低下(市川, 2002; 荻谷ら, 2002), 不登校や中途退学が問題とされる(文部科学省, 2013)。学習活動や学校生活への積極的な態度(以下, 修学意欲)の低下は, キャリア形成や成人期の職場適応を困難にする(Wang & Eccles, 2012)。この時期には対人関係に敏感になることから(Laursen & Bukowski, 1997), 身近な対人関係の中でも学意欲につながるやりとりを明らかにし, 将来の発達資産の形成を支える必要がある。

問題と目的

学校生活への積極参加を認知・行動・感情の多側面から捉える概念をスクール・エンゲージメントという(Fredricks et al., 2004)。欧米では学校環境の影響や学力や修学状況, 問題行動との関連が示されているが, 我が国では研究されていない。

本研究は, 我が国の中高生のスクール・エンゲージメントの実態を明らかにするとともに, 対人関係を規定要因とした説明モデルを検証する。

方法

調査対象者と手続き

2019年7月, 関東圏内の公立中学3校と高校1校の全校生徒に対し, 授業を介して質問紙調査を実施した(中学 $n = 1616$; 高校 $n = 1409$)。

調査内容

① School Engagement Scale(Fredricks et al., 2004)。行動面(「授業は集中して受けている」など4項目), 感情面(「学校では楽しい気分になる」など6項目), 認知面(「テストがない日も家で勉強する」など5項目), 計15項目。② Network Relationships Inventory (Furman & Buhrmester, 1992; 吉武ら, 2014): 5つの下位尺度(親密的開示, 信頼できる同盟, 避難場所, 安全基地, 葛藤, 各3項目)を使用し, 担任, 母親, 友だちとの関係を尋ねた。5件法。③ KINDL (Ravens-Sieberer & Bullinger, 1998; 柴田ら, 2003)の身体的健康, 精神的健康の下位尺度。④ 5教科自己評価の平均値。

本研究は筆者が属する大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した(順大倫第0008号)。

結果と考察

スクール・エンゲージメントの実態

スクール・エンゲージメントの3つの下位得点を学年別にプロットした(Figure 1)。感情的エ

ンゲージメント得点は安定した傾向を示したが, 行動的, 認知的エンゲージメント得点は学年を経るごとに下降傾向にあった。

説明モデルの検証

スクール・エンゲージメントの下位得点ごとに中高サンプル間の多母集団パス解析を行った。行動的エンゲージメントの分析結果をFigure 2に示す。中高生ともデータの適合は良好であったが, 行動的エンゲージメントが母親との葛藤と関連したのは高校生のみであり, 成績との関連は高校生より中学生の方が強かった。

一連の検討により, 学校適応を多側面から捉えることができるスクール・エンゲージメント尺度の有用性が示されたとともに, 対人関係や適応への影響は, エンゲージメントの側面や学校段階により異なることが明らかとなった。

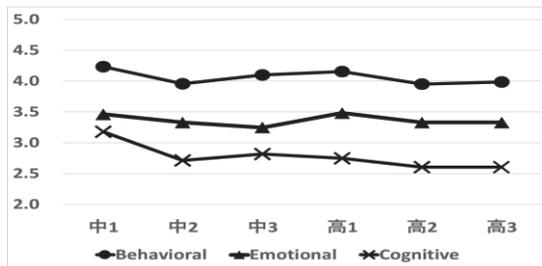
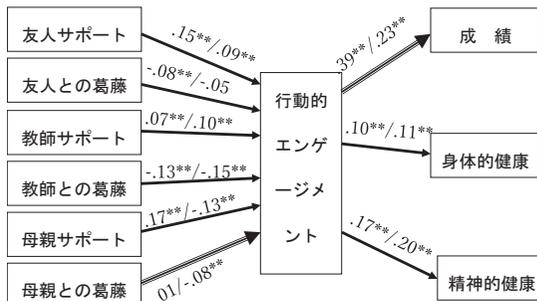


Figure 1 スクール・エンゲージメント得点の学年間推移



注: $\chi^2(42) = 416.41$, CFI = .92, RMSEA = .05
パス係数は中学生/高校生。学年と性別を統制した。

Figure 2 行動的エンゲージメントの説明モデルの検証結果